
妹

守水

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
妹

【Nコード】
N6851P

【作者名】
守水

【あらすじ】
唯一の話し相手だった、引きこもりの妹。しかし、彼女は妹ではなかった。

私には妹がいる。

「ただいま、実乃」

気がついたら、私の部屋にある押入れに、妹は閉じこもっていた。
「……………」

相変わらず返事はない。ほとんどあたしが話してばっかだから、気にはしてないけど。このことは、母には隠してある。でも、もしかしたら知ってるのかな、お母さんも。妹のこと、何も聞いてこないから。

「実乃、コロッケ買って来たよ。食べるでしょ？」

「……………」

聞こえるか聞こえないかぐらいの、か細い返事。別に体力がないわけじゃない。返事するのも面倒なのだ。

「……………」開けるよ」

戸を、ゆっくりと開ける。少し立て付けが悪く、戸は時々がたと音を立てた。

「ソースいらなんだもんね。はい、置くよ」

小さい皿にコロッケを二個置いて、そっと中に置く。中は真っ暗だ。暗闇の向こうに妹の姿は見えない。でも私にはわかる。妹はそこにいる。

戸を閉めたあと、私もコロッケを食べた。近所にある肉屋のコロッケは、とてもおいしい。私もソースなしで食べてる。むしろないほうがおいしいと思う。

「ねえ実乃……………」前話した瑠子ってやつのこと、覚えてる？」

「……………」

壁に寄りかかってコロッケを食べながら、私は実乃に聞いた。

「あいつね……………」今日私の外靴、おっきなごみ箱に入れたんだよ。クラスに置いてあるやつじゃなくて、みんなが持ってきたゴミを入

れる、あのでっかいごみ箱に。なんかだんだんエスカレートしてるんだ……。まあ、私だけじゃないけどね。被害受けてるのは。でもここまでひどいことされたのは、私が初めて」

「ふうん……」

無視してるわけじゃない。実乃は納得してるんだ。

「みんな仕返したいと思ってる。でも怖くてできない。ほとんど一人でやってるんだけど、言い逃れとかもうまいし。どうすればいいのかねえ」

「……お姉ちゃん」

ため息と共に吐き出した言葉に、実乃は珍しく声をかけてきた。ふと、戸を見る。

「お姉ちゃんは……ルコって人に………らいたいんだよね？」
「え？」

相変わらずのか細い声。一番肝心なところが聞こえなかった。

「“らいたい” って……。ああ、何かしてもらいたいってこと？
何て言ったの？ 実乃」

「ううん、もういいよ……。コロッケありがと、お姉ちゃん」

ごそごそと音が聞こえた。中にはタオルケットを入れてある。多分それにくるまって寝るんだろう。そっと戸を開けると、空になった皿があった。ころもの欠片が、少しあった。

「実乃……。今日おかしいことがあったの」
「何？」

あの押入れの前に座り込むなり、私は口を開いた。

「私の外靴、ごみ箱に入れられたってのは話したよね。そしたら今日、瑠子の外靴がごみ箱に入ってたの」

当然のように、瑠子は怒った。でも誰も、自分がやったと言う人はいなかった。いたとしても、あの剣幕じゃあ言い出せない。

「誰だろうね、そんな勇気のあることする人。でもこれからひどく

なっつくかもしれない。私が心配なのは、それだな……」

「……お姉ちゃん」

「ん？」

「お姉ちゃん……ホントは嬉しいんでしょ？ あたしにまで隠さなくteいいのに」

心臓がどきんと鳴った。これから襲い来るかもしれない、エスカレートしたいじめを心配するあまり、心の隅に追いやられていた私の本心が、なぜ妹にわかる？

「……っ、そんなことないよ」

もし妹が目の前にいたら、きつと額を流れる冷や汗を咎められただろう。

「みーの、いいもの買ってきたよ」

「どうしたの？ すごく楽しそうだね」

私はどきりと机にかばんを置くと、中から袋を二つ、取り出した。

「じゃーん、姉妹初、おそろい髪留め！ ほら、デザイン同じだけど色違い」

扉を開け、買ってきた髪留めを見せた。暗闇から、「あ、かわいい」と声が聞こえた。

「外で歩くことないだろうけど、おしゃれぐらいしたいでしょ？ ほら」

私は髪留めを転がした。黄色で透明の、ちよつとだけ派手な花模様の描かれた髪留めは、すぐ見えなくなった。

「どう？ って言っても見えないか」

「ううん、見えなくてもいい。すごく嬉しいよ、お姉ちゃん」

珍しく、本当に嬉しそうな声だった。妹だって女だ、おしゃれぐらいしたくなる。

「実を言うとね、最近不機嫌な瑠子が、あたしたちに自分のためについて、買い物させられたの。そのついでに買ったんだ。瑠子に感謝

ってとこかな。したくないけど」

ちよっと笑いながら言ったら、実乃も笑ったようだった。なんだから、姉としてのことをやったような、達成感みたいなものが湧き上がってきた。

「実乃。あんた、外出たの？」

「え？」

扉の前に座ってしばらくしてから、私は話し始めた。

「なんで？ あたし外が嫌いなもの、お姉ちゃん知ってるじゃない」

「そうだけどね……」

私は唾を飲み込んで、今日瑠子がみんなに言ったことを、瑠子が見たものをそのまま告げた。

「今日はね、瑠子の机の中に、画びょうが入ってたんだって。それが朝の会の時だったんだけど、そのあと全校集会があつて。で、体育館から帰るとき、誰かが瑠子の手画びょうを刺したんだって。すぐそれらしい人を見たら、それは女子で、そして、黄色で透明の花柄模様の髪留めをしてたって……」

「……お姉ちゃん、あたしのこと疑ってるの？」

少し悲しそうな声だった。

「……ごめん、つい……。私の周りに、それに合う特徴の人があんただけだったから。あたしの髪留めの色は………透明だし」

何やってるんだろ、私。実の妹を疑うなんて。

「きつと瑠子の目の間違いだよ。でも、こんなに瑠子にかかってくやつ……。クラスにいただなんて」

「……………」

珍しく、実乃は何か言おうとして、結局黙っていた。

「実乃……。今日、瑠子が殺されかけた」

「え？」

滅多に聞かない、実乃の本当に驚いた声だった。

「カッターで。刺されたの、瑠子が。今日はこの大雨でしょ。だから一斉下校させられたんだけど、それに混じって誰かが刺したみたい。あたし、この前と同じ人だと思うな」

「お姉ちゃん……」

「何？」

「誰か来るよ」

実乃のその言葉が消えた瞬間、階段を上ってくる音がした。私の知らない速さで、リズムで。ノックもなしに、部屋のドアが開けられた。

「……お前の妹がやったって？」

いたのは、同じクラスの男子二人と、女子一人だった。三人とも、クラスでよく中心となる人だ。

私に話しかけた男子は、振り向いた私に目線を合わせると、背に隠していた手を見せた。

黄色で透明の、花柄の模様の髪留めを持った手を。

「……実乃」

「お姉ちゃん、違うよ」

「何が！？ あれはあんたにあげたものでしょ！」

扉の奥の妹に叫んだのは、初めてだったかもしれない。そんなにすごい剣幕だったんだろうか、妹の部屋を向いて言ったのに、三人が少し引くのがわかった。

「こいつから聞いたぜ。お前が教室で、この黄色の髪留めの話をしたって。妹に買ってやったんだってな」

「そうだよ……。やっぱり妹が、実乃がやったんだね」

「いや、誰もやったやつは見えていない。これは刺された瑠子が、走って逃げていくやつ、カバンかポケットから落ちたのを見て、拾ったんだ」

「そしたら、絶対に実乃じゃない」

「今、おばさんに少し話を聞いたよ」

おばさん……。私のお母さんのことか。

「……なあ。瑠子を刺したのって、お前だろ？」

……何？ こいつは今、何て言った。

「変なこと言わないで。犯人はその髪留めを落としたんでしょ。そしてその髪留めを持ってるのは実乃だよ」

そいつは困ったような顔をした。だって、私の言ってることは間違いない。

「ねえ」

後ろにいた女子が前に出た。

「前、髪留めの話したよね。二つ買って、これは妹のだって、見せてくれたよね」

「そういえば、した」

「あんたに妹がいたって、意外だったけど……」

見守っていた男子が、隙を見て口を開いた。

「さっきおばさんに聞いた。お前、一人っ子だろ？」

「一人っ子……？ 嘘だよ、ここに妹がいるもん」

さっきから話してるじゃない。声が、この扉の奥から聞こえてるじゃない。

「今も話してたでしょ？」

「俺らにはその声は聞こえなかった」

「実乃の声は小さいから。ねえ実乃、何か言ってよ」

「なんかばれちゃったね。お姉ちゃん、お姉ちゃんは一人っ子だよ。あたしはお姉ちゃんだもん」

「ほら！ 今喋ったよ」

ただ実乃に喋ってほしくて、その内容なんて聞いてなかった。

「……開けるぞ」

とりあえず、問いかけになっていた。でもそう言った男子は、すでに私の横を通り過ぎ、押入れの扉に手をかけていた。

「やめて！ 実乃は外が嫌いなもの！ 他人も嫌いなもの！」

「そんな妹が、なんで瑠子を刺したんだよ」

……あれ？

立ち上がって止めようとした私が、ふいに固まったのを見て、そいつは戸を開け放った。

「真っ暗だな」

そいつは明かり代わりに携帯を開いて、中を照らした。実乃が、怖がってる。きっと。

「何かあったか？」

「これだけ」

そいつが引っ張り出したのは、実乃が使っていた毛布だった。

「妹なんかいないぞ」

「違うよ……。逃げたんだよ、実乃は。私じゃないよ、瑠子を刺したのは。髪留めは実乃にあげたんだもん。刺したのは実乃だよ」

私の頭には、逃げた実乃に対する怒りと、自分じゃないと言い張ることしかなかった。

「違う！ 私じゃない！」

毛布を掴んだ男子に、私は体当りをしていた。倒れはしなかった。代わりに、私の手首をもう一人の男子が掴み、体を女子が抑えた。

「瑠子に“死んでもらいたい”なんて思っていない！ 私は私の髪留めを使ってたんだ、黄色いのなんか使っていない！ 実乃はいるんだよ！ コロツケだって食べた！ 中で毛布かぶって寝る音だった！ 私じゃない、実乃だ、妹が……！」

「残念だねお姉ちゃん。今日刺したとき、あたしの振りをするのに入れた黄色の髪留め。あれ、落とさなきゃばれなかったのに」

が、囁いた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6851p/>

妹

2010年12月25日09時10分発行